

2016年12月2日

NHK 経営委員会委員長 石原進 様
経営委員各位

NHK 次期会長候補推薦名簿を提出します

NHK 全国退職者有志「次期会長候補推薦委員会」

時下ますますご清栄のことと存じます。

突然このようなお手紙を差し上げますことをお許してください。

私たちは、一昨年1月、靱井勝人氏がNHK会長に就任以来、公共放送のトップとしての資質に欠ける言動に終始していることに強い危機感を持ちました。会長就任時の記者会見における放送法に対する無理解、言論報道機関の命である自律性への認識の欠如をあからさまに語ってはばからない姿勢を新聞等で知った私たちは、このまま放置することの危険性を直感し、「これは間違いである」との声を上げることを決意しました。友人たちや知り合いに電話をかけ、メールを打ち、手紙を書きました。この「靱井会長罷免」の働きかけは、たちまち全国に広がりました。

その賛同者の数が1500名に達した8月、NHK経営委員会に対して「靱井会長罷免」の要望書を提出、年末には賛同者は2000名を越えました。

この後、2年半余りの期間、私たちは、靱井氏の言動を注視して参りましたが、会長としての矜持もなく、公共放送を理解しようという姿勢を見出すことは出来ませんでした。NHK会長がしばしば国会に召喚される事態も前代未聞でした。この間に失われたNHKへの信頼は、計り知れないものがあります。靱井氏の一連の言動は、放送における文化を辱めるものがある、と危惧しています。

私たちは、靱井勝人氏の再任は断じてあってはならないと考えます。

さらに、NHK予算を審議する参議院総務委員会においても、経営委員会に対して「会長選考については、今後とも手続きの透明性を一層図りつつ、選考の手続きの在り方について検討すること」と決議されておりますことは、ご承知の通りです。

私たちは、これまで多くの視聴者・市民団体とともに会長選任に当たって公募・推薦制の導入などを求めてまいりました。その運動の延長線上でこの7月、「次期会長候補推薦委員会」を組織し、外部の専門家の助言も得ながら公共放送NHKのトップに相応しい会長像について議論を重ねてまいりました。

私たちは、経営委員会が決定した、次期会長選任のための「5項目の資格要件」をも念頭に置きながら、経営委員会の議論に耐えうると思われる会長候補、会長として相応しいと誰もが評価しうる3人の方を会長候補として推薦いたします。今日のNHKが公共放送

として機能し、視聴者の信頼を取り戻すためにはベストであるとして選び抜いた人選です。

経営委員の皆様が推挙されます会長候補の一人として議論に加えていただきたく「別紙」の通りご提案いたします。

もとより、この人選は、NHK 全国退職者有志「次期会長候補推薦委員会」の勝手連的行動で、一切の責任は私たちにあります。

経営委員会におかれましては、初井会長時代に失われた NHK への信頼を取り戻し、日本の民主主義社会の発展に貢献する放送局とするため、一層のご努力をご祈念申し上げます。

「次期会長候補推薦委員会」(NHK 全国退職者有志) (五十音順)

() は NHK 在職中の主な職歴、退職後の経歴
池田 恵理子 (家庭・教養番組ディレクター。

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」<wam>館長)

大原 雄 (社会部記者。作家、日本ペンクラブ理事)

大治 浩之輔 (社会部記者、盛岡放送局長。

NPO 法人マスコミ市民フォーラム理事長)

小池 晴二 (美術部長。元武蔵野美術大学理事長)

小中 陽太郎 (テレビ文芸部ディレクター。作家)

小林 緑 (元 NHK 経営委員、国立音楽大学名誉教授)

砂川 浩慶 (立教大学教授、メディア総合研究所所長)

永田 浩三 (教養番組プロデューサー。武蔵大学教授)

根本 仁 (ドラマ部ディレクター。

NHK とメディアを語ろう・福島)

皆川 学 (音楽芸能番組部プロデューサー)

望月 亮 (技術本部・NHK エンジニアリングサービス事業部長)

長沼 士郎 (報道番組ディレクター)

松田 浩 (メディア研究者。

元日経新聞編集委員、元立命館大学教授)

村上 信夫 (アナウンサー)

事務局：

今井 潤 (報道局映像編集。「放送を語る会」代表)

伊東 周平 (エンジニア、盛岡放送局長)

門目 省吾 (産業番組ディレクター。番組制作プロダクション社長)

小滝 一志 (教育番組ディレクター)

田村 安正 (営業)

「別紙」NHK 全国退職者有志が推薦する次期会長候補（五十音順）

落合恵子氏（1945年栃木県生まれ） 作家

明治大学文学部卒。

1967年 文化放送にアナウンサーとして入社、1974年退社、作家活動に入る。

その後も多数のラジオ・テレビ番組に出演。

1988年 放送界の第一線で活躍する女性に贈られる日本女性放送懇談会賞（現在は放送ウーマン賞）受賞。

現在も、「落合恵子の絵本の時間」、「落合恵子のラジオデイズ」（NHK ラジオ第一）などの企画構成、出演番組多数。

1976年 「クレヨンハウス」を創業、東京表参道、大阪江坂に子どもの本の専門店・ジェンダーセンシティブな女性の本専門店等を展開。総合育児雑誌「月刊クーヨン」、絵本などの刊行、有機野菜市場、オーガニックレストラン経営など。

雑誌「週刊金曜日」編集委員。社会構造的に声の小さい側、子どもや高齢者、女性、障がいのある人などの声を中心に執筆講演活動を展開。

著書：「ザ・レイプ」（講談社）

「偶然の家族」（中央公論社）

「A列車で行こう」（新潮社）

最近の著書

「母に歌う子守唄……わたしの介護日誌」（朝日新聞社出版）

「てんつく怒髪 3・11以降の生き方」（岩波書店）

「おとなの始末」（集英社新書）

「質問・老いることはいやですか？」（朝日新聞社出版）ほか多数。

廣渡清吾氏（1945年福岡県生まれ） 法学者、日本フンボルト協会理事長・

（公財）日本学術協力財団副会長・東京大学名誉教授

1968年 京都大学法学部卒。

1991年～2009年3月 東京大学社会科学研究所教授、1998年～2001年 同所長。

1993年～94年 ドイツ・ミュンヘン大学客員教授。

2000年～11年 日本学術会議会員（この間 第2部長、第1部長、副会長）。

2002年～03年 東京大学総長特別補佐・副学長。

2011年7月～9月 日本学術会議会長。（人文社会系では初）

2009年～16年3月 専修大学教授。

2013年～日本フンボルト協会理事長。

2015年～（公財）日本学術協力財団副会長。

専門はドイツ法、比較法社会論。

著書：「二つの戦後社会と法の間—日本と西ドイツ」（1990年 大蔵省印刷局）

「統一ドイツの法変動—統一の1つの決算」(1996年 有信堂)
「市民社会と法」(2008年 放送大学教育振興会)
「比較法社会論研究」(2009年 日本評論社)
「学者にできることは何か—日本学術会議のとりくみを通して」(2012年 岩波書店)
「ドイツ法研究—歴史・現状・比較」(2016年 日本評論社)ほか多数。

村松泰子氏 (1944年東京都生まれ) 社会学者、

公益財団法人日本女性学習財団理事長・東京学芸大学名誉教授

1967年 東京大学文学部卒。

1967～91年 NHK放送文化研究所。

この間上智大学大学院博士課程(新聞学)単位取得後退学。

1991年 東京学芸大学教育学部教授。

2010～14年 同大学長。

この間、文部省学術審議会専門委員(1996年～98年)、文部省委託・男女平等教育研究会代表(1997年～99年)、日本教育大学協会会長(2010年～14年)、中央教育審議会委員(2011年～13年)などを歴任。

2014年から現職。

専門は社会学、メディア・コミュニケーション論、ジェンダー論。

著書:「テレビドラマの女性学」(1979年 創拓社)

「テレビ視聴の30年」(1983年 日本放送出版協会 <分担執筆>)

「女性の理系能力を生かす—専攻分野のジェンダー分析と提言」(1996年 日本評論社 <編著>)

「テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス」(2013年 大月書店 <分担執筆>)ほか多数。

私たちの推薦基準

私たちは、「放送は文化である」と考えます。文化にとって必要な要件は、「自律性」です。ドラマも音楽番組もバラエティーも、ドキュメンタリーもニュースも何者にも支配されず、NHKの責任において、制作されるべきものと考えます。会長はその先頭に立ち、「文化の創造」という理念に基づいて、経営にあたる象徴的存在であるべきであると考えます。そのために、次期会長候補推薦委員会では、以下の基準を設けて候補を推薦しました。

1. 「政権からのメディア干渉に立ち向かえる人」

最も重視すべき会長の資質は、「放送の自主・自律を守り、政府から独立したNHK経営ができること」と考えました。

2. 「視聴者の広い信頼と支持を得られる人」

会長は、人格的にも尊敬でき、政治的に公平な判断ができ、文化的素養を備えている人であることが必要と考えました。

さらに、指名部会が示した資格要件にある「構想力」「リーダーシップ」「経営的センス」を備えているかどうかを考えるうえで、社会的知名度や実績も考慮しました。